

□海外文献紹介□

Crohn 病における腸の安静および栄養療法の効果に関する比較試験

Controlled trial of bowel rest and nutritional support in the management of Crohn's disease: *Greenberg GR, et al* (Gut 29: 1309-1315, 1988)

近年、Crohn 病の治療法として TPN による腸の安静 (bowel rest) が有効であると報告されてきている。しかし、TPN による、完全な腸の安静 (complete bowel rest) が必ずしも必要かどうかについては疑問がある。食物の経口摂取の有無で 2 群に分けた比較試験では、ステロイド治療の場合、差がないとの報告もある。

そこで腸の安静がどの程度、治療効果を持つか比較試験を行った。対象は 51 例の活動期 Crohn 病患者で、TPN として全く経口摂取をしない群 (17 例)、半消化態栄養剤を経管投与する群 (19 例)、部分的非経口栄養で栄養補助をして経口摂取させる群 (15 例) の 3 群に分けて 21 日間治療を行い、症状、活動指数、栄養状態のパラメーターの改善を比較した。いずれの症例もステロイド治療以外の薬物治療は中止し、ほとんどの症例はプレドニン 15 mg, 30 mg, 45 mg のいずれかの 1 日投与量で治療された。また、緩解となった症例の 1 年後の緩解維持率の比較も行った。退院後の栄養補助は中止し、プレドニンの維持量 15 mg が投与された。その結果、臨床的な緩解

は 3 群でそれぞれ、71, 58, 60%, で得られ、更に 1 年後における緩解維持率もそれぞれ 42, 55, 56%, であった。いずれも有意な差を認めず、ステロイドを中心に治療する場合、活動期 Crohn 病に対する腸の安静は、緩解導入や、1 年後の予後に影響しないという結果になった。

この研究の目的は、栄養補助療法の有用性を否定するものではないが、それほど完全な腸の安静は必要でないという結論と共に、ステロイドの有効性を改めて示すものとなった。しかし、緩解維持療法としての、栄養療法の効果については、今後の検討が必要である。

(愛知県がんセンター消化器内科

白井正人 抄)